うたいながら，昨今の医道は荒廃してしまった.（部分引用）』としていた.

『洋学史研究事典』はこのズレの部分も，明治初期の問題をも採りあげており，今後の研究の一里程となると考える．蘭学・洋学の括りが，日本の学術分野で次第に相対的に小さいものになってきたことは残念であるが否定できない．今般の『洋学史研究事典』は研究の成果の上に今後の方向性と問題提起を行っている．貴重な事典が出版されたことを慶びたい.

（渡部　幹夫）

［思文閣出版，〒605-0089 京都市東山区元町355，TEL. 075（533）6860，2021年9月，B5判，516頁，13,000円＋税］

公益社団法人 日本麻酔科学会 編
『麻酔博物館設立10周年記念』

21世紀になってから，日本麻酔科学会の会員から「麻酔科学に関する歴史的資料を保管，展示する資料館または博物館を作るべきだ」という声と，学会執行部の「日本の麻酔科学の発展の軌跡を物語る器具や文献類が，時の経過とともに散逸してしまう」という危惧により，麻酔科をはじめとする医学・医療の発展に貢献してきた先達の功績をたたえ，後世に受け継ぐ資料を収蔵し公開する施設を設立する機運が高まり，2009年8月に「麻酔資料館」が設立された．日本麻酔科学会は2011年に公益財団法人化されたために，「麻酔資料館」も社会に開かれた一般の来館者に向けたメッセージを発信する必要が生じ，展示内容の充実・拡大が行われ「麻酔博物館」として2011年に新しく設立された.

この「麻酔博物館」が開館してから10年となる2021年に一般の方にもわかりやすく，さらに充実した博物館を目指して改修工事を行い，再開館した．このことを記念し作成されたのがこの冊子「麻酔博物館設立10周年記念」である．表紙・裏表紙＋52ページの小冊子ではあるが内容は充実しており，このように多くの画像を収録した日本の麻酔科学史に関する書物は初めてではないだろうか.

本書の内容は以下のようになっている.

第1章　麻酔博物館の概要と日本麻酔科学会の沿革
1. 日本麻酔科学会「麻酔博物館」
2. 公益財団法人日本麻酔科学会沿革

第2章　麻酔博物館の展示構成

第3章　麻酔博物館コーナー展示
1. 華岡青洲のコレクション
2. モートンのエーテル吸入器
3. 日本初麻酔器
4. 吸入麻酔薬「セボフルラン」の開発
5.「パルスオキシメータ」の発明
6. ラリンジアルマスクエアウェイ（LMA）の開発
7. 日本の麻酔先駆者：山村秀夫・天野道之助

第4章　手術室の変遷
1. 手術室展示の概要
2. 1960年代の手術室
3. 2000年代の手術室

第5章　麻酔法の進歩
1. はじめに
2. 麻酔器
3. 吸入麻酔薬と気化器
4. 気管チューブと喉頭鏡
5. モニター
6. 最新の麻酔薬

参考：麻酔科学史年表

以上の項目を見ただけでも麻酔科医の心は浮き立ってしまう．麻酔が発明されてから，現在の安全性の高い麻酔法に行きつくまでのマイルストーンである事項が数多く並んでいる．日本中の麻酔科医が知っている華岡青洲や世界中の麻酔科医が

知っているモートンによる麻酔の誕生に始まり，麻酔器ができ，各種吸入麻酔薬が開発され，それぞれの気化器が用いられた．現在世界中で最も使用されている吸入麻酔薬セボフルレンは米国で生まれ日本で育った薬剤である．この間，上気道閉塞を防止するための気道確保の手段として喉頭鏡や気管チューブ，ラリンジアルマスクエアウェイが開発・使用された．一方，手術中の痛みを取り除く全身麻酔は，人間の持っている意識という最も良いモニタリング機能を失わさせる．そのため，患者をモニタリングすることは，麻酔科学の重要な側面となった．最初，モニタリングは麻酔科医の感覚に頼っていた．麻酔専門医は脈を指で感じながら，呼吸と意識の状態を目で観察したと言われており，これは洋の東西を問わなかった．その後，パルスオキシメータをはじめとした患者安全のためのモニターが発展し，患者の安全性の向上に役立っている．この事は，手術・麻酔を離れて一般病棟や在宅医療にまで広がっている．

一方，麻酔科医以外の人々には，手術室の変遷が興味深いのではないかと思う．1960年代と2000年代の手術室の手術室を再現し，関連機器や備品の変遷をわかりやすく解説・展示している．麻酔科医が気管挿管を行い，全身麻酔の管理をするという，現代ではありふれた光景が始まったのが1960年代であった．この頃，大部分の手術室は壁面・床面ともにタイル張りが主流で，爆発性のある麻酔薬が用いられており，麻酔科医は五感に頼って患者の状態を観察した．大きなガラス製のアンプルにゴム管をつなぎ輸液を行うことが当時の最新鋭であった．2000年代になると，冷暖房完備のクリーンルーム手術室となった．安全装置が内蔵され，コンピュータ制御された麻酔器が登場し，各種生体情報も統合されモニターとして麻酔器に装着されるようになった．輸液剤の種類も増加し，輸液バッグ，回路がプラスチック性のディスポーザブル製品になった．以上，画像を多く用いて，日本における麻酔を含めた手術医学の進歩をわかりやすく説明している．この冊子を読んだ後は是非現地を訪れてほしい．現地では，最新（2020年代）の手術室の様子もバーチャルで再現している．他にも興味深いものが多く置かれている．

この小冊子のもとになったのは，麻酔資料館・博物館が十数年の間に収蔵・保存した物品である．麻酔科学会の重要文書と約670点の麻酔関連機器・器具はもちろんのこと，貴重書を含む約6900点の和洋の書籍・雑誌と視聴覚資料が収集され，その一部が展示されている．これらの資料を分類し，解説を加えるために麻酔博物館委員会・博物館館員ボードが委員会として存在する．今回の小冊子を作成するにあたって，これらの委員会会員が労苦をいとわず努力を重ねた．この事を高く評価したい．現在，内科，外科など日本医学会の中の数ある診療科（標榜科）の中で，このようなまとまった資料収蔵・公開を行っている施設を公益法人である学会が運営しているのは麻酔科学会のみである．今後，麻酔科学会以外の診療科でも博物館を設立して，個々の診療科の歴史を正しく後世に残すことができれば，日本医史学会の発展にもつながると思う．

（土手健太郎）

［麻酔博物館，〒650-0047 兵庫県神戸市中央区港島南町1丁目5番2号 神戸キメックセンタービル3階，TEL. 078（306）5945，2021年12月，B5判，52頁，非売品（来館者に進呈）］

田畑正久・桑原正彦・富士川義之・松田正典・佐々木秀美・栗田正弘・土屋　久 著
『富士川游の世界――医学史，医療倫理，そして宗教――』

富士川游（1865～1940）は，不朽の名著『日本医学史』でその名を広く知られる医学者・医学史研究者である．『日本医学史』は，増補修正を加えられた上で『日本医学史綱要』として覆刻され，